

CEA 陽性, CA19-9陽性, AFP 陰性であり, スードマウスへの生着率は6例中6例で100%であった。

この cell line を用い, CTL 移入による効果を観察する目的で, 転移モデル作製を試みた。現在まで尾静脈より静注, 脾臓への局注腹腔内投与を行ない, 2週後に検索したが, 転移形成はみられなかった。今後, 移入する癌細胞数を増加させるとともに上腸間膜静脈より直接注入するなど方法を改善する必要がある。

また, 誘導された CTL を背皮下移植腫瘍に対して投与し, 拒絶の有無, 浸潤するリンパ球のサブセットを免疫化学, 組織染色により分析する予定である。

26. 胃癌患者に対するレンチナン術前投与による免疫応答の検討

堀江 良彰

我々は, 胃癌患者に対し, レンチナンを術前に投与し, インターロイキン2産生能, NK 活性, PHA 幼若化率, ツ反等を調べている。また, 小野寺の栄養指数, 腫瘍マーカー, リンパ球表面抗原についても検討している。

特に NK 活性は, レンチナン投与により上昇し, 術後1週間目で低下した。術後の投与により2週間目に上昇したものがあつたが, 却って低下したものもあつた。これらの解析が現在進行中であるが, 初期の頃24時間測定法にて検査していた頃と比べると現在の12時間測定法ではばらつきが少なくなっている。測定誤差に対する考察が必要である。また, 不幸な転帰を辿った症例では免疫能も低下していた。今後症例を重ねて予後, ステージとの関連も検討する予定である。

27. 右主気管支断裂の治療に関する実験的研究

笠井 恵

右主気管支断裂の緊急時の治療は呼吸循環動態の管理に主眼がおかれるが, 最終的にはできるだけ右肺を温存したい。そこで右主気管支遮断犬を作製し1週間後に再開通させるモデルについて検討した。

1. PO₂は遮断直後より低下し1週間ほぼ同じ値をとったが再開通後は2日目で遮断前値に回復した。2. PCO₂はこの間ほぼ同じ値であった。3. 肉眼的には遮断により肝様肺となるが再開通2日目には健側と著変を認めなかった。4. 病理組織学的には胸膜の変化が主で実質には左右の肺に差が少なく, 右肺の変化が可逆的なものであると考えられた。5. 遮断側肺と健側肺のCMX 組織移行濃度に差はなく, 抗菌力を期待できる値であった。

以上より, 右主気管支断裂に対しての緊急処置は気

管支遮断だけにとどめ, 患者の状態の改善を待って, 期待的に気管支形成術を行えば良いと考えられた。

28. 超音波検査を用いたS状結腸・直腸癌のリンパ節転移の検討

(大分アルメイダ病院 外科) 進藤 廣成

【目的】直腸癌リンパ節転移は, 術前の検査では診断不可能に近いのが現状である。著者は超音波検査により, リンパ節描出の可能性を検討中であるので, その成果を報告する。

【方法と対象】検査は仰臥位にて施行する。大動脈を描出し, まずIMA を描出する。これを下方にたどり, 総腸骨動脈, 内外腸骨動脈, 外腸骨静脈を描出した。側方向は術中超音波検査により位置関係を確認した。症例は1988年1月以降に手術された直腸癌症例35例(術中超音波は20例に施行), S状結腸癌20例である。

【成績】各リンパ節の診断率をみると, sensitivity は IMA: 100%, 総腸骨動脈周囲: 100%, 内外腸骨動脈周囲: 100%, positive predictive value は IMA: 60%, 総腸骨動脈周囲: 100%, 外腸骨動脈周囲: 50%, 内腸骨動脈周囲: 75%であった。以上, 現状における成績を述べると共に, 代表例を紹介する。

29. 転移性肝癌に対するエタノール局注療法

(中野江古田病院 外科) 神崎 博

最近では転移性肝癌に対して肝切除や塞栓療法が行なわれ良い成績が示されている。しかしこれらの治療法の非適応例も多く, これらに対する治療法はまだ確立されたとはいえない。一方, 原発性肝癌に対するエタノール局注療法の有効性が報告されているが転移性肝癌に対する報告は少ない。

そこでわれわれは転移性性癌に対する局注療法を1989年1月より試みた。現在までに大腸癌肝転移例4例, 胃癌肝転移例2例に対して本療法を行なっている。方法はすでに諸家により報告されている原発性肝癌にたいするエタノール局注療法に準ずるが, 被膜がないこと, 多発することなど異なるところがあり症例により工夫が必要と思われた。まだ日が浅いため症例も少なく効果判定にまでは至らないが今後ますます症例を重ねていきたいと思う。

30. 非触知乳腺腫瘍の超音波診断に関する研究

(聖隷浜松病院 外科) 神尾 孝子

従来, 非触知乳癌は乳頭異常分必あるいは mammography における石灰化像から発見されていたが, その発見頻度は低く全乳癌症例に占める比率は 0.68~4.4%に過ぎない。しかしながら乳腺超音波診断

装置および診断技術の向上に伴い、乳管像や微細石灰化像あるいは微小な腫瘍像を超音波画像上に捉えることができるようになった。今回、非触知乳腺腫瘍40例における超音波画像上の特徴を独自に分類し、これに基づいた超音波画像を病理組織所見と対比、さらに超音波検査の診断率を他の検査法と比較検討した。

この結果、非触知乳腺腫瘍に対する超音波診断は他の検査法と比較しても、病変の存在診断、質的診断ともに成績は極めて良好で腫瘍を触知しない症例に対しては必須の検査法と考えられた。

31. 腹部外科手術後のエネルギー消費量の測定—間接熱量計の使用経験—

(豊岡第一病院 外科) 米山 公造

ベットサイドにて測定可能な間接熱量計の開発によってエネルギー消費量の測定は容易なものとなっている。当科においても平成元年3月よりSensor Medics社製のenergy expenditure unit 2900を1台購入し現在使用を開始している。今回は間接熱量計の紹介をすると共に、胃癌、大腸癌待機手術患者の術前術後にエネルギー消費量を測定し若干の知見を得たのでここに報告する。

方法：測定日は術前、術後1, 3, 7日目とし、測定時刻は患者が比較的安静にできる夕方としてエネルギー消費量の測定を行った。そして、その測定値とエネルギー投与量との間の関係を検討した。なお大多数の測定患者には術前よりIVHが行われておりほぼ一定の割合でエネルギーが投与されていると考えられた。

結果：Harris-Benedictの理論式より求められる基礎エネルギー消費量を基準として、エネルギー投与量、エネルギー消費量各々との比をとり、これらの値の相関関係を調べてみた。その結果、術前と術後各々で1次相関関係が95%以上の有意差を持って成立し、基礎エネルギー消費量をエネルギー投与量としたとき胃癌、大腸癌で各々術前と術後の間に11.6%、3.6%のエネルギー消費量の増加があることが求めた1次回帰直線より導かれた。この差のように疾患別に術後の必要エネルギー量は異なるようであり、おそらく緊急疾患においてはなおさらであろう。ここに間接熱量計によるエネルギー消費量の測定は適切なエネルギー投与に有用性が大きいのではないかと考えられる。

32. ヒト自己腫瘍特異的細胞障害性Tリンパ球の誘導

(秩父市立病院 外科) 富松 裕明

最近まで免疫療法は非特異的免疫賦活療法と呼ばれてきたが、まだ作用機序が充分解明されていない方法が主体であったが、免疫学や細胞工学などの急速な進歩により、種々の新しい免疫療法が開発され試みられている。

動物の悪性腫瘍を攻撃する免疫担当細胞は、NK細胞、LAK細胞、マクロファージ、顆粒球などの抗原非特異的なものと、細胞障害性Tリンパ球という腫瘍細胞に特異的なものに大別されている。後者はマウスを使用した実験で種々の方法で誘導されているが、ヒトの系での誘導を報告した文献はほとんどない。

そこで現在我々はヒトの末梢血リンパ球から細胞障害性Tリンパ球を誘導する最良の方法を定めるべく、種々の実験系を組み立て検討している。

33. 乳癌における癌遺伝子(c-erb B-2)の増幅と癌の悪性度との相関について

(立川中央病院 外科) 藤井 昭芳

癌遺伝子のうちc-erb B-2は、乳癌細胞内で、かなりの高いレベルに増幅しており、その程度が癌の悪性度と予後に影響を与えているという報告がある。既知の悪性度の指標である病期、リンパ節転移、脈管侵襲、hormon receptorと癌遺伝子の増幅の程度との相関について検討した。

対象：昭和63年3月よりの当科での乳癌症例のうち癌遺伝子を測定しえた20症例を対象とした。方法：1. 乳癌組織よりDNAの抽出、2. Southern blotting法、3. Hibridization、結果：20例中5例(25%)にc-erb B-2の増幅が認められた。この5例は、病期、リンパ節転移、脈管侵襲などで進行した症例が多く、estrogen receptorも陰性例が多かった。

今後症例を増やし、c-erb B-2の増幅の程度と癌の悪性度、予後との相関を調べ、癌遺伝子が悪性度の指標となりうるか検討したい。

34. 急性腹症に対する腹腔鏡の有用性について—一腹腔鏡の機器と手技の改良を含めて—

(木挽町医院) 宮崎 舜賢

教室では1982年より1989年10月までに、急性腹症で診断および手術適応決定が困難であった199例に腹腔鏡を施行した。

腹腔鏡により診断の得られた症例は123例(61.8%)に止まり、診断能に限界があることは明らかであるが、腹腔の炎症所見等から緊急手術適応の決定は、199例全例とも可能であった。疾患別では、イレウス(絞扼の有無、閉塞部位の確認)、腹部外傷(進行性出血、消化管穿孔の有無の確認)、下腹部炎症性疾患(虫垂炎、婦